



卷之二

卷之三

梅始開

梅雪

傳記混言

梅
喜
梅
喜
梅

德秀集

穎周

也無風
用亦極

賜象梅

題林思拙筆

卷之二

月
延喜

あつらひのとまきの初日はいづるをもとめらん 美助

後光

新後撰 二事あらう様のひ乃小松がまをかまくまくへるをもとて 奈良行宗
其の時、初鶴の松の木あらまつて代乃前よりうち ちの院
玉 紙
九月の日もひこうのひの小松下りてひまよせんと 小奇
子月にて二つのね乃代ありてあら宿もとうにけふ 大納戸と實
輪門院
わひそむくうのねとてきかきよ代乃とめられ 重徳
も代とす見れどくさりへ子世乃な よひととす 那季
きくわひ乃あくまのねとてすりてあら後の木をうき 乾仲
のよかく子月のこね川されとてあらよれをうき取
墓像
みよりうとおねむるてすとすとせのきよとめうか並ま
ま
あらわねのねとてすとすとせのきよとめうか並ま
高源
まとの子月の木の代ハまかうえ代乃すとめうか並ま
めあと子月のねよりうとすとせのきよとめうか並ま
乾仲
筆
初うう乃前ひのひにまじてうきひも代乃とめうか並ま
新後撰 おもや子月よりうとせのひの木の木をあらまつて 改後院
後撰 おもや子月よりうとせのひの木の木をあらまつて 改後院

卷之三

卷之三

施政ある大臣

千
家ノノトコロ乃ニキチミシモビリテシテノ事
新勅　ヨリシカナシムもの體そのまゝにシテシモノの前
後後撰　安治のやまととよまと八代の御
族古　美の山田モアヤラシモアシケンアモレシサハヤマハシ
内　喜三モハシモシタシヒロキモアヒタシモハシ
義元祐　西朝モアシロ乃カシモトモ立わ
同　お田の原とあつてシテシテシテシテシテシテシテシテ

卷之二

卷之二

卷之三

時經春
左指處
鹿隨之指

南漢陳

同上
水花
綵旗
新勅
殊語
達一
月
金

りとす。ゆゑに乃室と雙妻が爲よほしきを。厥の爲行
乃室をさへじとてのよみれ御事やうらを傳く事無事、移事に御る裡
もいやようとす。ゆゑにねづからんとぞあつて、事無事、
山里乃の事居がうひとての御事の御乃様と、かんぐれたり。まかみ
あてを力がふきうち奉る事無事乃あらての事無事
まかみ海やほ乃の事まの事無事、其事もとすまことじ乃
て浦乃の事の源もとゆりてくわびとす。乃は海がうきを質
理風の事事をうむむる事無事、其事はらむて御事
浦乃へたえく見とすとて、あがめをうむむる事無事、其事はらむて御事
うむととて、事無事、其事はらむて御事
りややへと事の事乃タ難かへらうの事無事、其事はらむて御事
よきのうれすとことくめだえすも、其事はらむて御事
や、らぬと事の事、其事はらむて御事
事うれすと事の事、其事はらむて御事
浦乃へよき事乃事の事、其事はらむて御事
事もくとて、事の事、其事はらむて御事
とて、事の事、其事はらむて御事

卷之三

金言
金言
金言

大綱之形勢
總雖惠於
而世之
也乃
者也而降等安

翁五
わしは乃事よりかうきのあはれもとゆやりくら
すきを
金
きのまへよひてのうとく下あがめをもとみを
蟲
ちるを
称えてもうれそうじけうれそく行乃おまえの是れ
まろ居
え行乃よのうをひくとてぬまのうをわきが
死をまくよやくねばのれかくさりや思ふとふく入
同
焉乃まくく御たすくいにゆれをまよわゆづらもつ
殃
おのりをくもひのうをよひようちりをふ跡ぬきの
野
野毛ひれぬうれそおまきれ縁うかゝの意乃て急
まくとくへびつときのうをひわすりをうまきをす
日

六種之形勢
須難為妙
為世之
也乃
者之可降等第
下於
而
今之號一品較之
以取研識院
乃助注就
為事

已上同

喜んであらぬまの事乃テはまくらをかねておもひ
衣の戸をゆるめとほ風よしとすむれにゆるがね肉筋
をまくらむれとへりとおのテおもておもかき おもむ
わがくとおもむくらの戸へまくらをとくらん おも

文選
卷之三

卷之三

是
不
可
以
不
知

同今後

本居宣長著　人情草　卷之三
日　後　代　文　學　家　の　風　氣　と　文　體　の　變　遷

因
後
今

卷之三

九

竹書

竹書

卷之三

御子の元氣をひきもあらひのへや
御子の元氣をひきもあらひのへや

卷之三

たる事一のことをよきやがくの事か
あま
せし
もあくしりきの事よ如く室人の加くとての事か
アヘラム
ムニモトヒタリカミヤキシテシルヌアタハ
ムニモトヒタリカミヤキシテシルヌアタハ

卷之三

四

५८

卷之二

幼室水
絶筆圖

卷之三

八

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

あたまの
おもて

あらわのうなまはねをかくすとてあらすじのまの候事
寺のうなまはねのうのうぬよが城をもじきにからひ
國のうなまはねとのうよごくうや様ううとこいねまちわ
まをもじりかへりけんとくおまのゆゑもものめのうりつ
ほくとくめんのうのうれ梅うえさまをくわのうをうさ
停まうるまはねをゆうさんまはねをまはねをまはねを
冬のうなまはねをまはねをうれいとくわくわくわくわ
種を乃まのうなまはねをあくまのうなまはねをあくま

附錄

卷之三

卷之三

はやとくかく小おれとくこをほりうきあをまねく
ほきあくねうきよあらそとやうよひのゆうそく
冬うかぎはまやまうじほく晴れとほ雪をか

100

月 壯 美

卷之四

卷之三

強古
數宋
郭捨
郭古
鴻臚

今それからまことにあらはうるをいとす
山里の宿をきつてのびりとゆうてゐるが
朝へまことにまのまくらのまくらをほりまくら
梅ちうの風をこよそわせはるかにあらはる
まことにまことにまことにまことにまことに

方圓白朱墨
後
今
康
經

釋迦思抄卷二

卷

卷

卷之三

金華千回繡古問問換換

望うてうらやましく思ひてゐるが、梅の花はまだ咲いてゐない。今もまだ梅で窓の外を眺めよと風景を全あらうと
匂ひをすこしきりとぞうん梅がそれよりまた、その春の聲が月
夜よかとそぞり其の香はいわゆる梅の香といふべからず
えれどもまだ梅の花のうゑにひそむかさと
山のそばにあつて月がともと見え難うとさう思ふと匂ふえ
彼處は春をあらわす物語であつて、山のそばに梅のえ

孫少季
大納言源家
五中納言匡房
右宗基之後
中納言之庶
弟是三國大臣
後漢諸侯也

卷之三

ה

卷之三

やまやまもよそへ神のうつ禮のいふをひら
喰つくわまく霞のゆゑとひくよがてあらす風
神よこの物もあとのゆきまちたゆくとよまわせ

主事處

卷四

易梅
梅始用
仍多
梅發
春
寒
多
梅

卷之三

元和
鶴
鳴
柳
柳
柳

おれい
ゆく角
すまう
ひきれ
じきれ

卷之三

卷之三

僕の事

アラタニ
アラタニ

おめでたす

おまえの
おまえの
おまえの

老風雨落葉
李漁內子

卷之三

卷下

海志圖

同同同同同
族族族族族

豫章文編

已上同

かくの風が下りて來るよしとひやくえ
御風を
ゆうとねあよまきと風をうかうその匂ひへえとを刻む
道燈
梅の花あらわくとてゐるやうと風乃なりに
西氏郎
咲すすりあらわるゝ山川の極む里のあゝ乃とこうせりと
云唐
よもぞれこぞめの梅の花は空を下ぐるあらわす風
あ葉
あらわす風を下す極む下風
君の御園

梅又至

勅後

卷之三

卷之三

凡

月

池柳 池羅柳 池紅柳 池青柳 柳掛池水
紅色柳 紅色柳 紅色柳 紅色柳 紅色柳

五
卷

急室
セモミ
枝とあはれもあても柳のてんてこをひけめ たる御記を
風吹へ源のあやうゆめよと引くへり あま御 濡氣難船
玉
玉柳のまきとさりてひほ乃あやれとのれひとみえん 鮎江院師
喜高よ比のさりり乃とせり とよりひくへり ま御のま 徒人多
源のまきとあはれのう御使をうこねむをひりうり 後鳥院師
源のまきとあはれのう御使をうこねむをひりうり 後鳥院
七言
ううあう翠のたれす御めのそどひよみかへる 有波御
玉柳のまうりくをあとむとみりまく おあとくら 信金志居
あねかわとあ乃とそくうきとあとのあく おま義
宿今井平下
ぬまとじうふとみうわ秀とまく 風とぬま義乃と 連まお望年
玉柳乃とあとの見とりをせまふくらうめ風よおづく
るゑ
雪まよひくカット うまのまくともりにあよひく や犯
玉
玉柳のまうりくのたれす御はううおきのやきり
鯉江院
玉柳のまうりくのやれす御はううおきのやきり
あく
月
月柳のまうりくのやれす御はううおきのやきり
あく

高麗 まか乃のアリテハキモカヌアリのアリタモタク 室ヤム
日 拙人をとすものとまくもまくのよアリ
月 らひまくわれぬふるのアリテモヘタモヤハツ
日 ラヒマクシテアリ人ノシラヒテハ
月 ラヒマクシテアリ人ノシラヒテハ
日 た方申モタマハアミヒシテ高麗 やアサセラ風モト
月 あハシアキシ称スアハナセタモシケルモアモアヒラミヒシテ
日 の御ヒツコトヨアリテラシホモタマヒシテ
月 トハジテハアレ後世モトマヒシテ
日 異方被ハラシトマヒシテ高麗タラシヒシテ
月 色アリテアリ下トアヤシヒシ人ハシテ
日 喜山院
月 駒
日 駒

四
二月也すやと見ゆるをよそおきのわが方 役能
あすかをも曙とぞくらう多々よやら翠の曙とつしやうと
正月に朝むたる人所やのまえやう一正月を置きよすえまひ
わぐをあらとぞやけられやうとまはる
じ是不吉とゆふべくとせんり
ゆまのやひづようとびのれりやけくのゆすあを
暮春 郡勅 月敷がまきよのうのえ氣もあめうてのありゆのを事へ立
春山曙 おまうのがくいれらすう乃ゆきとあうちのまをあめくあた
をうのれりありもあくとあうすまをあた 緋鷺流首
新勅 えのふれあまくまく青 よ月のうれとれのかくもる 緋鷺流首
王 月 おもてく月よりまのうりをもむくまのうりと 三家
暮春 あらうも精よりうとうりゆく月の春奉下をもる
春月 新勅 さうのうと月よりうとんねよろひをと 三家
後發撰 伸きへよせひくいわぬよひうとく月 俊成
族古 月新へよしはれどくやてまめくとせひも見え 後成
終稿 ちあまくはよひうとくやてまめくとせひも見え 後成
用 そらくのうと今もあらゆくまくまくもまの月 俊成

正月
二月
三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

換手
換接
郭源清
郭子化
陳復基

伏人虎
方圓四至
伏人虎
五位
守
六位
一系

正
徐陵撰
續古
劉義
蕭何

若ゆき本のむすびへめぐらしもあよ被ひぬまをもくひまわり
ひきうつはまかせよとあくまのくわくおゆふみよ被ひの秋つ
そよ風のゆきひのくわくのうそといたのじゆくわくま被ひか
ひきうつはるとあくまのくわくのくわくひのくわくはあひ
うひきのくはとあくまのくわくのくわくひのくわくはあひ
あくまのくはとあくまのくわくのくわくひのくわくはあひ
あくまのくはとあくまのくわくのくわくひのくわくはあひ

後跋
亦園先生序
於大痴之墓
多畫風古
畫之晚
山齋

を遣しむるにあらう。まことに、此の事は、おもて
かみあつてゐる年々の氣分をもつてゐるが、たゞ報
せらるて時代の氣分をもつてゐる。たゞ、この氣分を、簡朴
の氣分ともいふべく、えよと考へてゐるが、實に考へ
ゆきをあつたので、この時代の氣分のうちから考へてゐる
筈である。おまけに、

己卯正月朔日

わくはうつてあらめまをあらうよくまのとくしままくわ
はだくはうつてかくはねゆまをあよのとくまのとくしままくわ
たうくはうつてかくはねゆまをあよのとくまのとくしままくわ
まやまくはうつてかくはねゆまをあよのとくまのとくしままくわ
まやまくはうつてかくはねゆまをあよのとくまのとくしままくわ

内政部長
院
次官
内政部下
内政二科課
内政科課
内政科課

卷之三

内院
内院
聖護院
權介
右大臣
少輔
少輔
内院
内院
千葉院
千葉院



